# 第4章

# ラプラス変換

本章ではラプラス変換の数学的な基礎について解説する\*1.

# 4.1 ラプラス変換の定義と基本的な性質

定義 4.1. f(t) を  $[0,\infty)$  上の複素数値関数, s を複素数として, 積分

$$\mathcal{L}[f](s) = \int_0^\infty f(t)e^{-st}dt \tag{4.1}$$

を f(t) のラプラス変換 (Laplace transform) という.

例 4.1. f(t) = 1 に対するラプラス変換を求める.  $\operatorname{Re} s > 0$  とすると,

$$\mathscr{L}[1](s) = \int_0^\infty e^{-st} dt = \left[ -\frac{1}{s} e^{-st} \right]_0^\infty = \frac{1}{s}$$

明らかに、 $Res \le 0$  のとき上の積分は収束しない.

例 4.2. 次に, f(t) = t の場合を考える. Re s > 0 とすると, 部分積分により,

$$\mathscr{L}[t](s) = \int_0^\infty t e^{-st} dt = \left[ -\frac{t}{s} e^{-st} \right]_0^\infty + \int_0^\infty \frac{1}{s} e^{-st} dt = \left[ -\frac{1}{s^2} e^{-st} \right]_0^\infty = \frac{1}{s^2}$$

再び、Res < 0 のとき上の積分は収束しない.

例 4.3.  $\alpha \in \mathbb{C}$  を定数として  $f(t) = e^{\alpha t}$  を考える. Re  $s > \operatorname{Re} \alpha$  とすると,

$$\mathscr{L}[e^{\alpha t}](s) = \int_0^\infty e^{\alpha t} e^{-st} dt = \int_0^\infty e^{-(s-\alpha)t} dt = \left[ -\frac{1}{s-\alpha} e^{-(s-\alpha)t} \right]_0^\infty = \frac{1}{s-\alpha}$$

 $\operatorname{Re} s < \operatorname{Re} \alpha$  のとき上の積分は収束しない.

 $<sup>^{*1}</sup>$  ここでの説明は、概ね参考文献 [1] の 9 章あるいは [2] の 3.1 節に沿っている.

- 定理 **4.2.** (i)  $s = s_0 \in \mathbb{C}$  に対する f のラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s_0)$  が収束するならば、 $\operatorname{Re} s > \operatorname{Re} s_0$  のとき  $\mathcal{L}[f](s)$  も収束する.
  - (ii)  $s = s_0 \in \mathbb{C}$  に対する f のラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s_0)$  が発散するならば、 $\operatorname{Re} s < \operatorname{Re} s_0$  のとき  $\mathcal{L}[f](s)$  も発散する.

証明.  $\mathcal{L}[f](s_0)$  が収束するものとする. このとき

$$\Phi(t) = \int_0^t f(t)e^{-s_0 t} dt$$
 (4.2)

とおき、 $\operatorname{Re} s > \operatorname{Re} s_0$  とする. 部分積分により

$$\mathcal{L}[f](s) = \int_0^\infty f(t)e^{-st}dt = \int_0^\infty \Phi'(t)e^{-(s-s_0)t}dt$$
$$= \left[\Phi(t)e^{-(s-s_0)t}\right]_0^\infty + (s-s_0)\int_0^\infty \Phi(t)e^{-(s-s_0)t}dt \tag{4.3}$$

が得られる。  $\Phi(0)=0$ ,  $\lim_{t\to\infty}|\Phi(t)|=|\mathscr{L}[f](s_0)|<\infty$  より,上式の第 1 項目は零となり,第 2 項目の積分は  $M=\sup_{t\in[0,\infty)}|\Phi(t)|$  とおくと

$$\int_{0}^{\infty} |\Phi(t)e^{-(s-s_0)t}| dt \le M \int_{0}^{\infty} e^{-\operatorname{Re}(s-s_0)t} dt = \frac{M}{\operatorname{Re}(s-s_0)}$$

と評価できる. よって,  $\mathcal{L}[f](s)$  も収束し, (i) が成立する.

次に、 $\mathcal{L}[f](s_0)$  が発散すると仮定し、 $\operatorname{Re} s < \operatorname{Re} s_0$  とする. このとき、 $\mathcal{L}[f](s)$  が収束するものとすると、(i) により  $\mathcal{L}[f](s_0)$  は収束しなければならず矛盾する. よって、 $\mathcal{L}[f](s)$  も発散し、(ii) が成立する.

定理 4.2 から,与えられた関数 f(t) に対して,ある  $a \in [-\infty, \infty]$  が存在し, $\operatorname{Re} s > a$  ならばラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s)$  は収束し, $\operatorname{Re} s < a$  ならば発散することがわかる.ここで, $a = -\infty$  ならば任意の  $s \in \mathbb{C}$  に対して  $\mathcal{L}[f](s)$  は収束し, $a = \infty$  ならば発散するとしている. $\operatorname{Re} s = a$  のときは  $\mathcal{L}[f](s)$  は収束することも発散することもある.a をラプラス変換の収束座標 (abscissa of convergence),半平面  $\operatorname{Re} > a$  を収束域 (region of convergence) という.

例 4.4.  $f(t)=e^{-t^2}$  を考える. 任意の  $s\in\mathbb{C}$  に対して、関数  $e^{-t^2}e^{-st}$  は  $[0,\infty)$  上で有界、かつ

$$\lim_{t \to \infty} \log(t^2 e^{-t^2} e^{-(\operatorname{Re} s)t}) = \lim_{t \to \infty} (-t^2 - (\operatorname{Re} s)t + 2\log t) = -\infty$$

より  $\lim_{t\to\infty}(t^2e^{-t^2}e^{-(\mathrm{Re}\,s)t})=0$ , すなわち, $t\to\infty$  のとき  $e^{-t^2}e^{-(\mathrm{Re}\,s)t}=o(t^{-2})$  となるから,ラプラス変換はつねに収束し,収束座標は  $a=-\infty$  となる.

例 4.5.  $f(t) = e^{t^2}$  を考える. 任意の  $s \in \mathbb{C}$  に対して,

$$\lim_{t \to \infty} \log(e^{t^2} e^{-(\operatorname{Re} s)t}) = \lim_{t \to \infty} (t^2 - (\operatorname{Re} s)t) = \infty$$

となるから、ラプラス変換はつねに発散し、収束座標は $a = \infty$ となる.

 $\tau > 0$  として,  $[0, \infty)$  で定義された関数 f に対して

$$T_{\tau}f(t) = \begin{cases} f(t-\tau) & (t \ge \tau \, \mathcal{O} \, \mathcal{E} \, \mathfrak{F}) \\ 0 & (0 \le t < \tau \, \mathcal{O} \, \mathcal{E} \, \mathfrak{F}) \end{cases}$$

と書く.

命題 4.3. 関数 f,g に対して以下の式が成立する。ただし、f,g の収束座標を  $a_f,a_g$  と表し、 $\alpha,\beta,\sigma\in\mathbb{C},\ \tau\geq 0,\ \gamma>0$  とする。

- (i)  $\operatorname{Re} s > \max(a_f, a_g) \ \mathcal{O} \ \mathcal{E}, \ \mathcal{L}[\alpha f + \beta g](s) = \alpha \mathcal{L}[f](s) + \beta \mathcal{L}[g](s)$
- (ii) Re  $s > a_f \mathcal{O}$   $\geq 3$ ,  $\mathcal{L}[T_\tau f](s) = e^{-\tau s} \mathcal{L}[f](s)$
- (iii)  $\operatorname{Re} s > a_f \sigma \mathcal{O} \succeq \mathfrak{F}, \ \mathscr{L}[e^{-\sigma t}f](s) = \mathscr{L}[f](s+\sigma)$

(iv) Re 
$$s > \gamma a_f$$
 のとき,  $\mathcal{L}[f(\gamma t)](s) = \frac{1}{\gamma} \mathcal{L}[f(t)]\left(\frac{s}{\gamma}\right)$ 

証明. (i) は定義より明らか. (iii) については, 直ちに

$$\mathscr{L}[e^{-\sigma t}f](s) = \int_0^\infty e^{-\sigma t}f(t)e^{-st}dt = \int_0^\infty f(t)e^{-(s+\sigma)t}dt, = \mathscr{L}[f](s+\sigma)$$

(ii) および (iv) については、置換積分により、それぞれ、

$$\mathscr{L}[T_{\tau}f](s) = \int_{\tau}^{\infty} f(t-\tau)e^{-st}dt = \int_{0}^{\infty} f(u)e^{-s(t+\tau)}du = e^{-s\tau}\mathscr{L}[f](s)$$

および

$$\mathscr{L}[f(\gamma t)](s) = \int_0^\infty f(\gamma t) e^{-st} dt = \frac{1}{\gamma} \int_0^\infty f(u) e^{-su/\gamma} du = \frac{1}{\gamma} \mathscr{L}[f(t)] \left(\frac{s}{\gamma}\right)$$
 と示される.

例 **4.6.**  $k \in \mathbb{C}$  を定数として  $f(t) = \cos kt$  を考える. Re  $s > \max(\pm \operatorname{Re} ik) = |\operatorname{Im} k|$  のとき、命題 4.3(i) と例 4.3 より次のように求められる.

$$\mathcal{L}[\cos kt](s) = \mathcal{L}\left[\frac{1}{2}(e^{ikt} + e^{-ikt})\right](s) = \frac{1}{2}\left(\mathcal{L}[e^{ikt}](s) + \mathcal{L}[e^{-ikt}](s)\right)$$
$$= \frac{1}{2}\left(\frac{1}{s-ik} + \frac{1}{s+ik}\right) = \frac{s}{s^2 + k^2}$$

例 4.7.  $k \in \mathbb{C}$  を定数として  $f(t) = \sin kt$  を考える. Re  $s > |\operatorname{Im} k|$  のとき,命題 4.3(i) と例 4.3 より次のように求められる.

$$\mathcal{L}[\sin kt](s) = \mathcal{L}\left[\frac{1}{2i}(e^{ikt} - e^{-ikt})\right](s) = \frac{1}{2i}\left(\mathcal{L}[e^{ikt}](s) - \mathcal{L}[e^{-ikt}](s)\right)$$
$$= \frac{1}{2i}\left(\frac{1}{s - ik} - \frac{1}{s + ik}\right) = \frac{k}{s^2 + k^2}$$

# 4.2 微分とラプラス変換

定理 **4.4.** f(t) が t>0 で微分可能かつ有界な右極限  $f(+0)=\lim_{t\to+0}f(t)$  が存在するものとする. このとき、条件

- (i)  $\mathcal{L}[f](s)$  が収束
- (ii)  $\mathcal{L}[f'](s)$  が収束
- (iii)  $\lim_{t \to \infty} f(t)e^{-st} = 0$

のうち、いずれか2つが成立するならば、残りの条件も成立し、かつ次式が成立する.

$$\mathcal{L}[f'](s) = s\mathcal{L}[f](s) - f(+0) \tag{4.4}$$

証明. 広義積分の定義と部分積分により

$$\mathcal{L}[f'](s) = \int_{+0}^{\infty} f'(t)e^{-st}dt = \left[f(t)e^{-st}\right]_{+0}^{\infty} + s\int_{0}^{\infty} f(t)e^{-st}dt$$
$$= \lim_{t \to \infty} f(t)e^{-st} - f(+0) + s\mathcal{L}[f](s)$$

となる. (iii) かつ (i) あるいは (ii) が成立する場合は、上式から (ii) あるいは (i) が成立し、式 (4.4) を得る. (i) と (ii) のみが成立する場合は、まず上式から極限  $\lim_{t\to\infty}f(t)e^{-st}$ が存在し、この極限値は  $\mathcal{L}[f](s)$  が収束することから 0 となり式 (4.4) を得る.

定理 **4.5.** f(t) が t>0 で微分可能かつ有界な右極限  $f(+0)=\lim_{t\to+0}f(t)$  が存在し、さらに定理 4.4 の条件 (ii) が成立、すなわち、 $\mathcal{L}[f'](s)$  が収束するものと仮定する.このとき、以下の 2 つの条件のうちどちらか 1 つが成立するならば、 $\mathcal{L}[f](s)$  も収束し、式 (4.4) が成立する.

- (iv)  $\operatorname{Re} s > 0$
- (v) Re  $s \leq 0$  かつ  $\lim_{t \to \infty} f(t) = 0$

定理 4.5 の証明のため, 2 つの補題を示す.

補題 **4.6.** Re s>0 に対して  $\mathcal{L}[f](s)$  が収束するならば,  $t\to\infty$  のとき

$$\int_0^t f(t)dt = o(e^{(\operatorname{Re} s)t})$$

証明. 式 (4.2) で  $s_0=s$  とおき関数  $\Phi(t)=\int_0^t f(t)e^{-st}dt$  を定める. 式 (4.3) と同様に、部分積分により、

$$\int_0^t f(t)dt = \int_0^t \Phi'(t)e^{st}dt = \Phi(t)e^{st} - s \int_0^t \Phi(t)e^{st}dt$$

を得る. よって,  $\lim_{t \to \infty} \Phi(t) = \mathscr{L}[f](s)$  かつ

$$se^{-st} \int_0^t e^{st} dt = e^{-st} (e^{st} - 1) \to 1 \quad (t \to \infty)$$

であるから,

$$\lim_{t \to \infty} e^{-st} \int_0^t f(t)dt = \mathcal{L}[f](s) - \lim_{t \to \infty} se^{-st} \int_0^t \Phi(t)e^{st}dt$$
$$= \lim_{t \to \infty} se^{-st} \int_0^t (\mathcal{L}[f](s) - \Phi(t))e^{st}dt$$

となる. さらに、任意の $\varepsilon > 0$ に対して、t > Tのとき

$$|\Phi(t) - \mathcal{L}[f](s)| < \varepsilon$$

となるようにT > 0を選ぶと,

$$\left|\int_0^t (\mathscr{L}[f](s) - \Phi(t))e^{st}dt\right| \leq \int_0^T |\mathscr{L}[f](s) - \Phi(t)|e^{(\operatorname{Re} s)t}dt + \varepsilon \int_T^t e^{(\operatorname{Re} s)t}dt$$
 となるから、

$$\lim_{t \to \infty} \left| e^{-st} \int_0^t f(t) dt \right| \le \lim_{t \to \infty} \varepsilon |s| e^{-(\operatorname{Re} s)t} \int_T^t e^{(\operatorname{Re} s)t} dt \le \frac{\varepsilon |s|}{\operatorname{Re} s}$$

これより結論を得る.

補題 4.7.  $\operatorname{Re} s < 0$  に対して  $\mathscr{L}[f](s)$  が収束するならば,  $t \to \infty$  のとき

$$\int_{t}^{\infty} f(t)dt = o(e^{(\operatorname{Re} s)t})$$

証明.  $\Psi(t)=\mathcal{L}[f](s)-\int_0^t f(t)e^{-st}dt=\int_t^\infty f(t)e^{-st}dt$  とおくと、 $\lim_{t\to\infty}\Psi(t)=0$  であり、部分積分により、

$$\int_{t}^{\infty} f(t)dt = -\int_{t}^{\infty} \Psi'(t)e^{st}dt = \Psi(t)e^{st} + s\int_{t}^{\infty} \Psi(t)e^{st}dt$$

を得る. よって

$$e^{-st} \int_{t}^{\infty} f(t)dt = \Psi(t) + se^{-st} \int_{t}^{\infty} \Psi(t)e^{st}dt$$

となる. 任意の  $\varepsilon > 0$  に対して, t > T のとき  $|\Psi(t)| < \varepsilon$  となるように T > 0 を選ぶと,

$$\left| e^{-st} \int_{t}^{\infty} \Psi(t) e^{st} dt \right| \leq \varepsilon |s| e^{-(\operatorname{Re} s)t} \int_{t}^{\infty} e^{(\operatorname{Re} s)t} dt = \frac{\varepsilon |s|}{-\operatorname{Re} s}$$

となるから、補題の結論を得る.

定理 4.5 の証明. 定理 4.4 の条件 (iii) が成立することを示す.

まず, (iv) の場合, 補題 4.6 により

$$\int_0^t f'(t)dt = f(t) - f(+0) = o(e^{(\operatorname{Re} s)t})$$

となる. よって、Res > 0 から条件 (iii) が成立する.

次に, (v) の場合, Res < 0 ならば, 補題 4.7 により

$$\int_{t}^{\infty} f'(t)dt = \lim_{t \to \infty} f(t) - f(t) = -f(t) = o(e^{(\operatorname{Re} s)t})$$

となり、条件 (iii) が成立する. Re s=0 ならば、条件 (iii) が成立することは明らかである.  $\Box$ 

例 4.8.  $f(t)=1-e^{-t}$  を考える.  $\mathcal{L}[f](s)=\frac{1}{s}-\frac{1}{s+1}$  で収束座標は 0 となる. s>0 のとき,  $\lim_{t\to\infty}f(t)e^{-st}=0$  であるから, 定理 4.4 の条件 (i) と (ii) は満たされ, 式 (4.4) は成立する. -方,  $f'(t)=e^{-t}$  であり,  $\mathcal{L}[f'](s)=\frac{1}{s+1}$  で収束座標は -1 となる. しかし,  $\lim_{t\to\infty}f(t)=1\neq0$  で定理 4.5 の条件は満たされず,  $\operatorname{Re} s\in(-1,0)$  のとき式 (4.4) は成立するとは限らない (実際,  $\mathcal{L}[f](s)$  と  $\lim_{t\to\infty}f(t)e^{-st}$  は収束しない ).

定理 4.5 を繰り返し適用することにより、次の結果が得られる.

系 **4.8.** f(t) が t>0 で n 回微分可能かつ有界な右極限  $f(+0), f'(+0), \ldots, f^{(n-1)}(+0)$  が存在し、 $\mathcal{L}[f^{(n)}](s)$  が収束するものと仮定する.このとき、条件

(iv')  $\operatorname{Re} s > 0$ 

$$(v')$$
 Re  $s < 0$  かつ  $t \to \infty$  のとき  $f(t), f'(t), \dots, f^{(n-1)}(t) \to 0$ 

のうちどちらか 1 つが成立するならば、 $\mathscr{L}[f](s),\mathscr{L}[f'](s),\ldots,\mathscr{L}[f^{(n-1)}](s)$  も収束し、

$$\mathcal{L}[f^{(n)}](s) = s^n \mathcal{L}[f](s) - f(+0)s^{n-1} - f'(+0)s^{n-2} - \dots - f^{(n-1)}(+0)$$

が成立する.

4.3 たたみ込み **7** 

注意 4.9. 系 4.8 の条件が成立するとき,

$$f(t)e^{-st}, f'(t)e^{-st}, \dots, f^{(n-1)}(t)e^{-st} \to 0 \quad (t \to \infty)$$

となる. すなわち,  $t \to \infty$  のとき  $f(t), f'(t), \dots, f^{(n-1)}(t) = o(e^{(\operatorname{Re} s)t})$  である.

#### 4.3 たたみ込み

t < 0 で f(t), g(t) = 0 とし、f と g のたたみ込みを

$$(f * g)(t) = \int_0^t f(t - u)g(u)du$$

と定める. 明らかに, f\*g=g\*f である. たたみ込みのラプラス変換に対して次の結果が成立する.

定理 **4.10.** f(t),g(t) のラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s),\mathcal{L}[g](s)$  が  $s=s_0$  で絶対収束するならば、たたみ込みのラプラス変換  $\mathcal{L}[f*g](s)$  も  $s=s_0$  で絶対収束して、次式が成立する.

$$\mathcal{L}[f * g](s_0) = \mathcal{L}[f](s_0) \cdot \mathcal{L}[g](s_0)$$
(4.5)

証明.  $\mathcal{L}[f](s_0), \mathcal{L}[g](s_0)$  が絶対収束することより

$$\mathcal{L}[f](s_0) \cdot \mathcal{L}[g](s_0) = \int_0^\infty f(u)e^{-s_0 u} du \int_0^\infty g(v)e^{-s_0 v} dv$$
$$= \int_0^\infty \int_0^\infty f(u)g(v)e^{-s_0(u+v)} du dv$$

t = u + v,  $\tau = v$  と変数変換すると, 上式は

$$\int_0^\infty \int_0^t f(t-\tau)g(\tau)e^{-s_0t}d\tau dt = \mathcal{L}[f*g](s_0)$$

と変形され,式(4.5)を得る.また,

$$\int_{0}^{\infty} |(f * g)(t)| e^{-(\operatorname{Re} s_{0})t} dt \le \int_{0}^{\infty} \int_{0}^{t} |f(t - \tau)g(\tau)| e^{-(\operatorname{Re} s_{0})t} d\tau dt$$

$$= \int_{0}^{\infty} \int_{0}^{\infty} |f(u)g(v)| e^{-(\operatorname{Re} s_{0})(u+v)} du dv$$

$$= \int_{0}^{\infty} |f(u)| e^{-(\operatorname{Re} s_{0})u} du \int_{0}^{\infty} |g(v)| e^{-(\operatorname{Re} s_{0})v} dv$$

となるから、 $\mathscr{L}[f*g](s)$ も絶対収束する.

注意 4.11. たたみ込みのラプラス変換について、また以下のことが成立する.

- (i)  $\mathcal{L}[f](s)$ ,  $\mathcal{L}[g](s)$ ,  $\mathcal{L}[f*g](s)$  が  $s=s_0$  で収束するならば、式 (4.5) が成立する.
- (ii)  $\mathcal{L}[f](s)$ ,  $\mathcal{L}[g](s)$  が  $s=s_0$  で収束し、少なくとも一方が絶対収束するならば、  $\mathcal{L}[f*g](s)$  も  $s=s_0$  で収束し、式 (4.5) が成立する.

証明は [1] の 9.6 節を参照せよ.

例 4.9.  $\operatorname{Re} s>0$  とし、このとき  $\mathscr{L}[f](s)$  が収束するものとする。また、g(t)=1 とすると、例 4.1 より  $\mathscr{L}[g](s)=\frac{1}{s}$  である。ここで、 $F(t)=\int_0^t f(u)du$  とおくと、F(t)=(f\*g)(t) だから、注意 4.11(ii) より

$$\mathscr{L}[F](s) = \frac{1}{s}\mathscr{L}[f](s)$$

が成立する. 一方, F'(t) = f(t), F(+0) = 0 であるから, 定理 4.5 により

$$\mathcal{L}[f](s) = s\mathcal{L}[F](s)$$

となり、上の結果が再び得られる.

#### 4.4 一様収束性と正則性

定理 **4.12** (一様収束性). f(t) のラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s)$  が  $s=s_0$  で収束するならば、任意の  $\theta\in(0,\pi/2)$  に対して  $s_0$  を頂点とする角領域

$$\Delta = \{ s \in \mathbb{C} \mid |\arg(s - s_0)| < \theta \}$$

において  $\mathcal{L}[f](s)$  は一様収束する.

証明. 式 (4.2) により関数  $\Phi(t)$  を定める.  $\mathcal{L}[f](s)$  が  $s=s_0$  で収束することより、極限  $\lim_{t\to\infty}\Phi(t)$  が存在する. よって、任意の  $\varepsilon>0$  に対して、 $t_1,t_2>\rho$  ならば

$$|\Phi(t_2) - \Phi(t_1)| < \varepsilon$$

が成立するように正数  $\rho=\rho(s_0,\varepsilon)$  を取ることができる.  $s\in\Delta$  とすると,  $t_0>\rho$  のとき、部分積分により

$$\int_{t_0}^{\infty} f(t)e^{-st}dt = \int_{t_0}^{\infty} e^{-(s-s_0)t}\Phi'(t)dt = (s-s_0)\int_{t_0}^{\infty} e^{-(s-s_0)t}(\Phi(t) - \Phi(t_0))dt$$

となる. よって

$$\left| \int_{t_0}^{\infty} f(t)e^{-st} dt \right| \le |s - s_0|\varepsilon \int_{t_0}^{\infty} e^{-\operatorname{Re}(s - s_0)t} dt = \frac{|s - s_0|}{\operatorname{Re}(s - s_0)}\varepsilon < \frac{\varepsilon}{\cos \theta}$$

が成立し、結論を得る.

定理 **4.13** (正則性). f のラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s)$  は、収束域  $\operatorname{Re} s > a$  (a は収束座標) において正則である. さらに、次式が成立する.

$$\frac{d^n}{ds^n} \mathcal{L}[f](s) = \int_0^\infty (-t)^n f(t) e^{-st} dt \left( = \mathcal{L}[(-t)^n f](s) \right)$$
(4.6)

証明. 証明では次の定理を用いる.

定理 4.14. 領域 D 上の正則関数列  $\{f_n(z)\}_{n=1}^{\infty}$  が、各点  $a \in D$  に対して、ある閉円板  $\bar{D}(a;r) = \{z \in \mathbb{C} \mid |z-a| \le r\} \subset D$  (r>0) が取れて、その上で f(z) に一様収束するものとする。このとき、f(z) も D 上正則である。さらに、導関数の列  $\{f_n^{(k)}(z)\}_{n=1}^{\infty}$   $(k \in \mathbb{N})$  も各点  $a \in D$  に対して、ある閉円板  $\bar{D}(a;r') = \{z \in \mathbb{C} \mid |z-a| \le r\} \subset D$  (r'>0) が取れて、その上で  $f^{(k)}(z)$  に一様収束する。

定理 4.14 の証明は,例えば,参考文献 [4] の定理 5.3 を参照せよ.また,定理の条件を満たす関数列  $\{f_n(z)\}_{n=1}^\infty$  は D 上で f(z) に広義一様収束 (uniform convergence in the wide sense) するという.

定理 4.13 の証明に戻る. f のラプラス変換を次のように書き直す.

$$\mathscr{L}[f](s) = \sum_{k=0}^{\infty} \alpha_k(s), \quad \alpha_k(s) = \int_k^{k+1} f(t)e^{-st}dt$$
 (4.7)

収束域の任意の点  $s=s_1$  に対して, $a<\mathrm{Re}\,s_0<\mathrm{Re}\,s_1$  を満たすように  $s_0$  を取り,定理 4.12 の角領域  $\Delta$  を定める. $\Delta$  内に  $s=s_1$  を中心とする半径 r>0 の小円  $\bar{D}(s_1;r)=\{s\in\mathbb{C}\mid |s-s_1|\leq r\}$  を取ると,式 (4.7) は  $\bar{D}(s_1;r)$  で一様収束する.さらに, $\bar{D}(s_1;r)$  において,指数関数のテイラー展開の一様収束性より,

$$\alpha_k(s) = \int_k^{k+1} f(t) \sum_{j=0}^{\infty} \frac{(-st)^j}{j!} dt = \sum_{j=0}^{\infty} \frac{s^j}{j!} \int_k^{k+1} (-t)^j f(t) dt$$

は正則である. よって、定理 4.14 により  $\mathcal{L}[f](s)$  も正則となる. また、

$$\alpha_k^{(n)}(s) = \sum_{j=n}^{\infty} \frac{s^{j-n}}{(j-n)!} \int_k^{k+1} (-t)^j f(t) dt$$
$$= \sum_{j=0}^{\infty} \frac{s^j}{j!} \int_k^{k+1} (-t)^{j+n} f(t) dt = \int_k^{k+1} (-t)^n f(t) e^{-st} dt$$

となるから,式 (4.7) を項別微分して式 (4.6) を得る.

注意 4.15.  $a_n$  を  $\mathcal{L}[t^n f](s)$  の収束座標とする.定理 4.13 より  $a_n \leq a$  となる.また,以下のように  $a_1 \geq a$  であることが示されるので,任意の自然数 n に対して  $a_n = a$  となる.

まず、 $\operatorname{Re} s>a_1$  とし、 $\Phi_1(t)=\int_0^t tf(t)e^{-st}dt$  とおく、任意の  $\varepsilon>0$  に対して十分大きな T>0 を取れば、 $t_1,t_2>T$  のとき  $|\Phi_1(t_1)-\Phi_1(t_2)|<\varepsilon$  となる、 $\tau>T$  とすると、

$$\int_{\tau}^{\infty} f(t)e^{-(s+\varepsilon)t}dt = \int_{\tau}^{\infty} \frac{1}{t}e^{-\varepsilon t}\Phi_{1}'(t)dt = \int_{\tau}^{\infty} \frac{1+\varepsilon t}{t^{2}}e^{-\varepsilon t}(\Phi_{1}(t)-\Phi_{1}(\tau))dt$$
 \$\displaystyle \text{\displaystyle} \text{\displaystyle} \text{\displaystyle}.

$$\left| \int_{\tau}^{\infty} f(t)e^{-(s+\varepsilon)t} dt \right| \le \varepsilon \int_{\tau}^{\infty} \frac{1+\varepsilon t}{t^2} e^{-\varepsilon t} dt = \frac{e^{-\varepsilon \tau}}{\tau}$$

が導かれる. 任意の  $\varepsilon>0$  に対して  $\tau\to\infty$  のとき上式は 0 に収束するから,  $a\leq a_1$  を得る.

#### 4.5 反転公式

定理 4.16 (反転公式). f(t) を  $[0,\infty)$  上の関数で、任意の有限区間で区分的に滑らか(有限個の点を除いて  $C^1$  級で、不連続点で f'(X) の右極限と左極限が存在)であると仮定し、a をラプラス変換  $\mathcal{L}[f](s)$  の収束座標とする.  $\sigma > a$  ならば、t > 0 に対して次式が成立する.

$$\frac{1}{2}(f(t+0) + f(t-0)) = \frac{1}{2\pi i} \int_{\sigma - i\infty}^{\sigma + i\infty} \mathcal{L}(f)(s)e^{st}ds$$

$$\tag{4.8}$$

参考文献 [3] の III 章, 例題 1.3 を条件をゆるめたものに修正して,この定理を証明する.証明では次の補題を用いる.

補題 **4.17** (ディリクレの積分定理). g(t) が区間  $(\alpha, \beta)$  で区分的に滑らかならば、 $t \in (\alpha, \beta)$  のとき次式が成立する.

$$\lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{\pi} \int_{0}^{\beta} g(u) \frac{\sin \lambda (u-t)}{u-t} du = \frac{1}{2} (g(t+0) + g(t-0))$$

証明.以下では、次式が成立することを示す.

$$\lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{\pi} \int_{t}^{\beta} g(u) \frac{\sin \lambda (u - t)}{u - t} du = \lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{\pi} \int_{0}^{\bar{\beta}} g(t + u) \frac{\sin \lambda u}{u} du = \frac{1}{2} g(t + 0)$$
 (4.9)

ここで、 $\bar{\beta} = \beta - t$  である. 式 (4.9) と同様に次も証明できるので、補題の結論を得る.

$$\lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{\pi} \int_{\alpha}^{t} g(u) \frac{\sin \lambda (u - t)}{u - t} du = \frac{1}{2} g(t - 0)$$

まず、関係式  $\int_0^\infty \frac{\sin t}{t} dt = \frac{\pi}{2}$  により (各自確めよ)、式 (4.9) は

$$\lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{\pi} \int_0^\beta (g(t+u) - g(t+0)) \frac{\sin \lambda u}{u} du = 0$$
 (4.10)

4.5 反転公式 11

と同等である. そこで, tの値を固定し,

$$h(u) = \begin{cases} \frac{1}{u}(g(t+u) - g(t+0)) & (u \in (0, \bar{\beta}] \text{ obs}) \\ g'(t+0) & (u = 0 \text{ obs}) \\ 0 & (u \notin [0, \bar{\beta}] \text{ obs}) \end{cases}$$

によって, $(-\infty,\infty)$  で有界かつ有限個の u の値を除いて連続な関数 h(u) を定める.式 (4.10) は

$$\lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{\pi} \int_0^{\bar{\beta}} h(u) \sin \lambda u \, du = 0 \tag{4.11}$$

と書ける.

さて.

$$\int_0^{\bar{\beta}} h(u) \sin \lambda u \, du = \int_{-\infty}^{\infty} h(u) \sin \lambda u \, du = \int_{-\infty}^{\infty} h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \sin \lambda \left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) du$$
$$= -\int_{-\infty}^{\infty} h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \sin \lambda u \, du$$

であるから,  $\lambda > \pi$  ならば

$$\left| \int_0^{\bar{\beta}} h(u) \sin \lambda u \, du \right| = \frac{1}{2} \left| \int_{-\infty}^{\infty} \left( h(u) - h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \right) \sin \lambda u \, du \right|$$

$$\leq \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \left| h(u) - h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \right| du = \frac{1}{2} \int_{-1}^{\bar{\beta}} \left| h(u) - h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \right| du$$

となる. ここで, u<0 または  $u>\bar{\beta}$  のとき h(u)=0 であることを用いた. したがって

$$\lim_{\lambda \to \infty} \left| \int_0^{\bar{\beta}} h(u) \sin \lambda u \, du \right| \le \lim_{\lambda \to \infty} \frac{1}{2} \int_{-1}^{\bar{\beta}} \left| h(u) - h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \right| du$$
$$\le \frac{1}{2} \int_{-1}^{\bar{\beta}} \lim_{\lambda \to \infty} \left| h(u) - h\left(u + \frac{\pi}{\lambda}\right) \right| du = 0$$

を得る. よって, 式 (4.11), すなわち, 式 (4.9) が成立する.

定理 **4.16** の証明.  $s = \sigma + iu$  とおき,

$$\frac{e^{-\sigma t}}{2\pi i} \int_{\sigma-iR}^{\sigma+iR} \mathscr{L}[f](s) e^{st} ds = \frac{1}{2\pi} \int_{-R}^{R} e^{iut} du \int_{0}^{\infty} f(v) e^{-(\sigma+iu)v} dv$$

と書く. 定理 4.12 により, v に関する積分は  $\sigma > a$ , |u| < R で一様収束する. よって, 積分順序が変更できて, 上式の右辺は

$$\frac{1}{2\pi} \int_0^\infty f(v)e^{-\sigma v} dv \int_{-R}^R e^{-iu(t-v)} du = \frac{1}{\pi} \int_0^\infty f(v)e^{-\sigma v} \frac{\sin R(v-t)}{v-t} dv$$

と変形される.  $a < s_0 < \sigma$  を満たす実数  $s_0$  に対して式 (4.2) により関数  $\Phi(t)$  を定め,  $\delta = \sigma - s_0 > 0$  とすると,部分積分により,上式の右辺の積分は

$$\int_{0}^{\infty} \Phi'(v)e^{-\delta v} \frac{\sin R(v-t)}{v-t} dv$$

$$= -\int_{0}^{\infty} \Phi(v)e^{-\delta v} \left( -\delta \frac{\sin R(v-t)}{v-t} + \frac{d}{dv} \left( \frac{\sin R(v-t)}{v-t} \right) \right) dv$$
(4.12)

と計算される. ロピタルの定理により

$$\lim_{v \to 0} \frac{d}{dv} \left( \frac{\sin Rv}{v} \right) = \lim_{v \to 0} \frac{Rv \cos v - \sin Rv}{v^2} = \lim_{v \to 0} \frac{-Rv \sin v}{2v} = 0$$

であり、かつ  $\Phi(t)$  は有界であるから、式 (4.12) の積分は R>0 で一様収束する. よって、R>0 で一様に

$$\lim_{T \to \infty} \int_{T}^{\infty} f(v)e^{-\sigma v} \frac{\sin R(t-v)}{t-v} dv = 0$$

が成立する. さらに、補題 4.17 により、t>0 に対して、 $R\to\infty$  のとき

$$\frac{1}{\pi} \int_0^T f(v)e^{-\sigma v} \frac{\sin R(t-v)}{t-v} dv \to \frac{1}{2} (f(t+0) + f(t-0))e^{-\sigma t}$$

となるから,式(4.8)を得る.

注意 4.18. (i) 定理 4.16 の証明で t=0 とすると、式 (4.9) とから、次式が得られる.

$$\frac{1}{2}f(+0) = \frac{1}{2\pi i} \int_{\sigma - i\infty}^{\sigma + i\infty} \mathcal{L}[f](s)ds$$

(ii) 定理 4.16 で、f(t) が区分的に滑らかという条件は、有界変動である、すなわち、有限区間  $[\alpha,\beta]$  の任意の分割

$$\alpha = t_0 < t_1 < \dots < t_{n-1} < t_n = \beta$$

に対して、分割に依存しないある定数 M>0 が取れて

$$\sum_{k=1}^{n} |f(t_k) - f(t_{k-1})| < M$$

が成立するという条件に置き換えられる. 詳細は参考文献 [1] の 9.5 節あるいは [2] の 3.1.7 節を参照せよ.

4.5 反転公式 **13** 

半無限区間  $(0,\infty)$  で滑らかな関数 f(t) のラプラス変換を  $F(s) = \mathcal{L}[f](s)$  とする.ラプラス変換の逆変換 (逆ラプラス変換 (inverse Laplace transform) という) を  $\mathcal{L}^{-1}$  と表すと,定理 4.16 より, $\sigma \in \mathbb{R}$  をある定数として次式を得る.

$$f(t) = \mathcal{L}^{-1}[F](t) := \frac{1}{2\pi i} \int_{\sigma = i\infty}^{\sigma + i\infty} F(s)e^{st}ds$$
 (4.13)

ただし、注意 4.18(i) により  $\mathcal{L}^{-1}[F](0) = f(+0)$  となる. これより、F(s) が半無限区間  $(0,\infty)$  で滑らかなある関数 f(t) のラプラス変換ならば、F(s) をそのラプラス変換とする (すなわち、 $F(s) = \mathcal{L}[f](s)$  を満たす) 滑らかな関数は一意的に定められる. 次の例が示すように、簡単な形の関数 F(s) に対しては、その線形性や定理 4.10 を用いることにより、公式 (4.13) によらずに、逆ラプラス変換  $\mathcal{L}^{-1}F(s)$  を容易に求めることができる.

例 4.10.  $F(s) = \frac{1}{s^2 + s + 1}$  の逆ラプラス変換を求める.

$$F(s) = -\frac{i}{\sqrt{3}} \left( \frac{1}{s - (-1 - i\sqrt{3})/2} - \frac{1}{s - (-1 + i\sqrt{3})/2} \right)$$

であり、例 4.3 より、収束座標  $a=-\frac{1}{2}$  として、

$$\mathcal{L}^{-1} \left[ \frac{1}{s - (-1 - i\sqrt{3})/2} \right] (t) = e^{(-1 - i\sqrt{3})t/2},$$

$$\mathcal{L}^{-1} \left[ \frac{1}{s - (-1 + i\sqrt{3})/2} \right] (t) = e^{(-1 + i\sqrt{3})t/2}$$

となる. よって, 逆ラプラス変換の線形性から,

$$\mathscr{L}^{-1}[F](t) = -\frac{i}{\sqrt{3}} \left(e^{(-1-i\sqrt{3})t/2} - e^{(-1+i\sqrt{3})t/2}\right) = \frac{2}{\sqrt{3}} e^{-t/2} \sin\frac{\sqrt{3}}{2}t$$

を得る. 同様な方法を用いることにより、有理関数 F(s) の逆ラプラス変換はしばしば容易に求めることができる.

例 4.11.  $F(s) = \frac{1}{(s^2+1)^2}$  の逆ラプラス変換を求める. 例 4.7 より

$$\mathcal{L}^{-1}\left[\frac{1}{s^2+1}\right](t) = \sin t$$

よって、定理 4.10 より、次を得る.

$$\mathcal{L}^{-1}[F](t) = \sin t * \sin t = \int_0^t \sin(t - u) \sin u \, du$$

$$= \sin t \int_0^t \sin u \cos u \, du - \cos t \int_0^t \sin^2 u \, du$$

$$= \frac{1}{2} \sin^3 t - \frac{1}{2} \cos t (t - \frac{1}{2} \sin 2t) = \frac{1}{2} (\sin t - t \cos t)$$

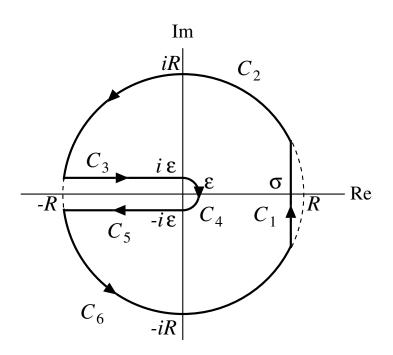


図 4.1 例 4.12 の積分路  $C = C_6C_5 \cdots C_1$ 

例 4.12. 公式 (4.13) を用いて, $F(s)=e^{-\sqrt{s}}$  の逆ラプラス変換  $f(t)=\mathcal{L}^{-1}[F](t)$  を求めてみよう. $\log s$  を対数関数の主値として, $\sqrt{s}$  の分枝は主値  $\exp(\log s/2)$  を選ぶ.

まず、 $0<\varepsilon<\sigma< R$  とし、 $C_1,C_3,C_5$  を、それぞれ、2 点  $\sigma-i\sqrt{R^2-\sigma^2}$  と  $\sigma+i\sqrt{R^2-\sigma^2}$  、 $-\sqrt{R^2-\varepsilon^2}+i\varepsilon$  と  $i\varepsilon$ 、 $-i\varepsilon$  と  $-\sqrt{R^2-\varepsilon^2}-i\varepsilon$  を結ぶ線分、 $C_2,C_6$  を、それぞれ、2 点  $\sigma+i\sqrt{R^2-\sigma^2}$  と  $-\sqrt{R^2-\varepsilon^2}+i\varepsilon$ 、 $-\sqrt{R^2-\varepsilon^2}-i\varepsilon$  と  $\sigma-i\sqrt{R^2-\sigma^2}$  を結ぶ半径 R の円弧、 $C_4$  を 2 点  $i\varepsilon$  と  $-i\varepsilon$  を結ぶ半径  $\varepsilon$  の円弧とし、 $C=C=C_6C_5\cdots C_1$  とおく、C の内部で  $e^{-\sqrt{s}+st}$  は正則だから、コーシーの積分定理により  $\oint_C e^{-\sqrt{s}+st}ds=0$  となる、 $R\to\infty$ 、 $\sigma,\varepsilon\to0$  のとき、

$$\int_{C_1} e^{-\sqrt{s}+st} ds \to \int_{-i\infty}^{i\infty} e^{-\sqrt{s}+st} ds, \quad \int_{C_j} e^{-\sqrt{s}+st} ds \to 0 \quad (j=2,4,6)$$

であり、 $s = xe^{\pm i\pi}$  とおくと

$$\int_{C_3} e^{-\sqrt{s}+st} ds \to -\int_{\infty}^{0} e^{-i\sqrt{x}-xt} dx, \quad \int_{C_5} e^{-\sqrt{s}+st} ds \to -\int_{0}^{\infty} e^{i\sqrt{x}-xt} dx$$

となるから

$$\int_{-i\infty}^{i\infty} e^{-\sqrt{s}+st} ds = \int_{0}^{\infty} e^{-xt} (e^{i\sqrt{x}} - e^{-i\sqrt{x}}) dx = 2i \int_{0}^{\infty} e^{-xt} \sin \sqrt{x} dx$$
$$= 2i \int_{-\infty}^{\infty} u e^{-tu^{2}} \sin u \, du = \frac{i\sqrt{\pi}}{t^{3/2}} e^{-1/4t}$$

を得る. ここで、 $\mathfrak{F}[e^{-\lambda^2 t^2/2}](\xi) = \frac{1}{\lambda}e^{-\xi^2/2\lambda^2}$  より

$$\frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_{-\infty}^{\infty} it e^{-\lambda^2 t^2/2} e^{-i\xi t} dt = \mathfrak{F}[it e^{-\lambda^2 t^2/2}](\xi) = -\frac{d}{d\xi} \left(\frac{1}{\lambda} e^{-\xi^2/2\lambda^2}\right) = \frac{\xi}{\lambda^3} e^{-\xi^2/2\lambda^2}$$

であることを用いた. したがって

$$f(t) = \frac{1}{2\pi i} \int_{-i\infty}^{i\infty} e^{-\sqrt{s} + st} ds = \frac{1}{2\sqrt{\pi}t^{3/2}} e^{-1/4t}$$

# 4.6 微分方程式への応用

次の定数係数の微分方程式を考える.

$$x^{(n)} + a_1 x^{(n-1)} + \dots + a_n x = f(t)$$
(4.14)

ここで、 $a_1, \ldots, a_n$  は実定数、f(t) は連続関数とする.初期条件  $x^{(k)}(0) = 0$   $(j = 0, \ldots, n-1)$  を満たす解をラプラス変換を用いて求める.

Re s>0,  $\mathscr{L}[x^{(n)}](s)$  と  $F(s)=\mathscr{L}[f](s)$  が存在するものとする. 系 4.8 により式 (4.14) の両辺をラプラス変換すると,  $X(s)=\mathscr{L}[x](s)$  として

$$(s^n + a_1 s^{(n-1)} + \dots + a_n) X(s) = F(s)$$

となる. よって,

$$G(s) = \frac{1}{s^n + a_1 s^{(n-1)} + \dots + a_n}$$

とすると,

$$X(s) = G(s)F(s)$$

と変形される. さらに,  $g(t)=\mathcal{L}^{-1}[G](t)$  とすれば, 定理 4.10 により x=g\*f, すなわち

$$x(t) = \int_0^t g(t - u)f(u)du$$
 (4.15)

を得る. 工学分野では、関数 G(s) を伝達関数 (transfer function)、関数 g(t) を衝撃応答関数あるいはインパルス応答関数(impulse response function) と呼ぶことがある.

例 4.13. 次の微分方程式を考える.

$$x'' + x = f(t) \tag{4.16}$$

伝達関数は

$$G(s) = \frac{1}{s^2 + 1}$$

であり、例 4.7 より、衝撃応答関数は

$$g(t) = \sin t$$

となる. よって、式 (4.15) から、x(0), x'(0) = 0 を満たす式 (4.16) の解は

$$x(t) = \int_0^t \sin(t - u) f(u) du$$

で与えられる. 特に,  $f(t) = e^{-t}$  のときは次式が得られる.

$$x(t) = \int_0^t \sin(t - u)e^{-t} du = \frac{1}{2}(e^{-t} - \cos t + \sin t)$$

# 参考文献

- [1] 河田龍夫, 応用数学概論 I, 岩波全書, 岩波書店, 1950.
- [2] 布川昊,制御と振動の数学,機械工学大系3,コロナ社,1974.
- [3] 吉田耕作,加藤敏夫,大学演習 応用数学 I,裳華房,1961.
- [4] 神保道夫,複素関数入門,岩波書店, 2003.